

International Student Center News

金沢大学留学生センター ニュース



vol. 5

March 2002

「創造価値」と大学

ほり ぼやし たくみ
堀 林 巧
（留学生センター長）

外国滞在で印象に残っていることはいくつもあるが、折に触れ思い出すのは以下の人（と光景）である。カリフォルニアのフレスノという小さな町の日系人を訪問した時、イタリアからの移民芸術家（画家であったと記憶している）の館跡を案内された。芸術家は、生前、外界との接触を断ち、ひたすら創作に没頭したという。館周辺の畑、地下室の食糧貯蔵庫が自給自足の生活を伺わせる。頻繁に訪問・滞在するハンガリーの友人のなかに外科医がいた（数年前他界）。その友人はユダヤ系であるがゆえの苦難にくわえ交通事故で両足が不自由になるという境遇のなかで、定年まで名医として職業を全うし多くの人命を救い医学の発展に貢献した。彼が70歳代の時に出会ったのであるが、頭脳明晰で森羅万象に尽きない知的好奇心を持つこの友人から私は多くのことを教わった。私がこれらの人の生き方に魅せられるのは、彼らが「天職」（学問・芸術を通じた人類への貢献）を生き「創造価値」を実現したからである。アウシュビッツを生き延び、その体験を綴った『夜と霧』で有名な心理学者（精神科医）フランクルは、人生の意味を「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」に分類した。彼をして、過酷な収容所生活を耐えさせ、解放後知った両親と妻の死の悲しみから立ち直らせたのは、収容所に送られる前から取り組んでいた学説を世に問いたい一心（「創造価値」実現）であったとされる。大学の改革をめぐる動きが急である。社会の変化（とりわけ国際化と少子高齢化）の影響を大学も逃れることはできない。「競争力」のない大学は外国人（留学生）はもちろん日本人によっても選択されない。ヨーロッパ中世に始まる大学は「学問への共通の情熱で結ばれた学徒」の共同体であった（喜多村『大学は生まれ変わるか』中公新書）。やがて「文化資本」と「経済資本」の結びつきが強まった。とはいえ、真理探究の情熱で結ばれた共同体としての性格、「創造価値」探究と離れて大学は存立し得ない。「創造価値」探究・実現の共同体としての魅力増大が大学の社会的貢献や「競争力」の核心にあるといえよう。現在のような時こそ、この自明のことを再確認しておきたい。そして、留学生教育充実・海外派遣促進とともに、本学が有しているこの面での魅力を世界に広く発信していくことも留学生センターの責務の一つであることの自覚を強めたい。

留学生センターのホームページを知っていますか？

皆さんは留学生センターのホームページを見たことがありますか？センターの提供するコースの紹介や時間割などが載っています。

日本語版（下図）のほかに、ほぼ同じ内容の英語版もあります。

ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

日本語版 URL

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/>

英語版 URL

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/eg/kuisc.html>





がく ちよう 学長インタビュー

パオ キョク バイ
包 玉 梅
医学部保健学科 1年 中国
マンダール・クルカルニ 日本語・日本文化研修生 インド
エリック・スチュアート 研究留学生 (文学研究科) U.S.A.

「学長室に入るのは初めてなので緊張しますね」という留学生3名による、林学長へのインタビューは、学長自身のアメリカでの留学生活の様子から始まり、金沢大学に関する質問を中心に、中国・韓国・北朝鮮などの隣国との諸問題や9.11の同時多発テロの国際社会での位置づけ、さらには湾岸戦争の問題など多岐に渡り、率直かつオープンな意見交換であった。留学生が是非聞きたかった金沢大学に関する事柄にポイントを絞り、ここに再現したい。

＜金沢大学が力を入れている国際交流＞

(留学生) 私たちは海外から金沢大学にきていますが、金沢大学の学生はどこへ行きますか？

「金沢大学から海外へ出ている学生は、例えば、ペンシルバニアのような古くからの協定校には継続的に何人か行っているが、決して多くない。日本でも多くの大学が日本人学生の海外派遣に力を入れている。それらの大学では、海外留学のためのセメスターの調整や取得した単位の認定などに便宜を図っている。即ち海外留学は自国での教育に優先してどのようなメリットを出すかにある。留学生の受入れと日本人学生を送り出すシステムを作りたい。」

(留学生) 日本から外国へ行くのはどこの国が多いですか？また、現在はグローバル化の時代と言われているのに、(全学の)1万人の中で数十人しか留学しないのは問題ですね。

「一般に学生は専門との関わりで海外へ行くので、特にどこの国へ行くかは決まっていない。また、留学する学生が少ないのは問題。大学側では、海外へ送り出すことも含め、学生に対するサービスとして、様々な教育システムを提供するとともにそのための制度を取り入れることが必要だと考えている。そのうえで金沢大学は、留学生が増えるように学生の意識と動機を高めねばならない。」

＜金沢大学の特徴＞

(留学生) 金沢大学はどのようにして(街から離れた)山の中に来たのですか？また、金沢大学の特徴を教えてください。

「どんな大学でも、移転した当初は街から距離があるところに位置している。角間を通り抜ける県道は、そのまま富山県につながっている。計画中の道路が完成すると県境などなくなり、県を越えて市街地が結ばれるようになる。」

金沢大学の特徴は、日本でいうと基幹大学。面積は全国で3～4番目、予算は国立大で10番目、研究論文の数は13～14番目、科学研究費は15番目くらい。旧制帝大が7～8校ある中で地域に根差した基幹大学とすることができる。つまりは、これまでの歴史を考えると、日本の基幹大学でありながら地域に根差しているのが特徴。

まず、地理的な問題がある。次に、歴史的に見ても、医学部は日本では長崎に続いて2番目の古さである。また、県庁前にある旧四高の建物一全国で7校ある旧制高等学校のうちの一や金沢高等師範からの教育学部など、それらが集まって1949年に出来た大学。戦争がなければ、8番目の旧制帝大すなわち北陸帝国大学構想が戦争によって実現しなかった。が、それだけの意味があり、過去の歴史を引き継ぎながら、地域に根差している大学である。」

(留学生) これから新たに作られる理系キャンパスの特徴は何ですか？

「工学部・薬学部・理学部の自然系とそれらの3学部に加えて自然科学研究科が新たに角間につくるキャンパスにやってくる。基礎となる学部を束ね、その上に総合と学際をもった研究科

がある訳で、そこでの専攻は科学技術政策における重点項目とは必ずしも直結せず人為の影響を含む新たな自然科学をフィロソフィーとしている。

大学院後期（博士）課程では、知を創成しギャップ・オブ・ナレッジを埋める作業をする中で新たな領域が出てくる。それを学部へとフィードバックする。教育・研究でそれを深め、広めていく役割は、大学院前期（修士）が受け持つ。つまり、大学院後期課程は常に躍進し続け、そこでは新たな学問領域の形成をしている。研究の先端だけを追いかけるのではなく、そこには学問がなければならない。」

<留学生から金沢大学に望むこと>

（留学生）現在、日本語・日本文化研究生として1年間の予定で金沢大学で勉強しているが帰国して再び、金沢大学に留学して勉強したい希望を持っています。その場合、金沢大学からのポジティブ・アクションはありますか？

「（留学の）目的意識の高いリピーターは、大学としても大いに歓迎で、それをこれからのように制度化するかが問題。帰国後、再度留学のための試験を受け、全くの（留学）初心者のように扱うのか。それとも金沢大学独自のルートで直接、日本に来られる様にするのかを、関係する委員会で検討する必要がある。」

（留学生）KUSEPなら金沢大学の協定の学生であるから、再度金沢大学に来ることができるけれども、国費留学生（の日研生）は協定校の学生ではないから、金沢大学にはもう来ることができない。金大で再留学のためのテストや資格を与えて、再び戻って来れるようなプログラムがあれば良いと思いますが…。

「現在学内外で、国際交流のための支援組織を作り、協力をお願いしている。協定校とのプログラムで、金大独自のものをやるためには、資金が足りない。まさに、そのようなことができる大学が力のある大学で、2004年以降の国立大学法人化の中でこれからの競争となるだろう。」

（留学生）学生どうしが交流する機会が欲しいです。留学生どうしも日本人どうしもそれぞれ、中国人は中国人のグループ、日本人は日本人のグループと固まっていて交流なんか全くしていませんよ。

〔他の留学生から反論有り。KISSのグループが毎週1回集まって、国際交流をやっているから、そうした集まりに参加してみると良いのでは？との提言。また、別の留学生からは、社会人の友達が多いことや社会的な活動を日本人学生と一緒にやっている例が紹介された〕

「大学だけではなく、市民との交流があることを聞きほつとしている。高校生までの段階と比べて、大学生になると、学業の空間・生活の空間・文化の空間が一気に広がる。金沢では伝統文化を取り入れたプログラムが多い。」

<まとめに代えて－留学生に望むこと－>

「日本人は、特に大学生の世代は閉鎖的。留学生はそうした日本人学生のカラを破って欲しい。日本人学生はシャイでもあるし、英語に対するアレルギーもある。本来ならば、日本人学生が、留学生に声を掛ければ良いのだが、留学生の方から日本人学生に声を掛けてもらいたい。」

<インタビューを終えての感想>

林学長とお話出来ること自体、とても大きなチャンスでしたし、金沢大学の特徴をいろいろ伺って、納得することができました。さらに、このインタビューを一緒にした、他の留学生たちとも知り合いになり、様々なタイプの留学生がいたことが参考になりました。これからの留学生生活を頑張ろうと思います。ありがとうございました。（包玉梅）



VOTAK(ヴォタック)と留学生の「日本・世界事情」

VOTAKというのは、Volunteer Tutors Association of Kanazawa Universityの略です。日本語研修コースの留学生と共に「日本・世界事情」活動を行い、金沢大学の国際化に貢献しています。

日本語研修コースの留学生は、世界中の国々から集められた研究留学生と教員研修生です。大学院入学前の半年の間、週5日、1日4コマ日本語を勉強します。日本語の初歩から始めて、半年で初級日本語レベルを修了するというハードなコースです。綿密に組まれたシラバスの中に、日本人学生との共同活動「日本・世界事情」の時間が週1コマ設けられています。2002年の前期は、月曜日の4限目です。

日本人学生は、学期の初めに募集されます。オリエンテーションを受けて、趣旨に賛同する人が登録し、毎週1回の活動に参加します。主体的・積極的参加が求められます。教官による指導がありますが、活動内容の選択や会の運営は学生に任されています。主な活動は、日本の紹介やゲーム、留学生による「私の国」発表、英語と日本語を使ったディスカッション、個別に行う自由会話などです。コースの他の行事にも参加できます。

月に一度、日本人学生と教官だけのミーティングがあります。異文化接触、コミュニケーション、言語教育のことなどが話題になり、活動を通して見つけた問題点を話し合います。必要なら、教官による「日本語の教え方」の講義もあります。

つまり、この活動は、留学生にとっても大きな利益がありますが、日本人学生にとっても利益が大きいです。世界のいろいろな国から来た留学生と共に活動することによって、様々なことを学び、自分自身の視野を広げる機会となります。また、将来日本語教育や言語教育の職につきたいと考えている人には、ほんとうに役に立ちます。このコースの留学生は、日本語力ゼロのレベルから日本語を学ぶので、その手伝いをすることによって、日本語教授法の授業で習った理論を実践することができるのです。楽しく教育実習をすることができ、先生に何でも訊け、試験もないし、友達もできるという、これを書いている私(三浦)でさえ信じられないような、いいことづくしです。日本人学生が負担に感じるかもしれない点を敢えて言えば、毎週参加する義務と活動報告書を出す義務があり、「指示待ち」の姿勢では駄目だと言われることです。実は、そんなことも、自分自身が世界で通用する人になるための訓練なのです。

このように、留学生センターは、留学生の教育を行うだけでなく、世界で活躍できる日本人学生を育てることも視野にいられています。初級日本語教育に興味があって、やる気のある日本人学生は、VOTAKに参加して国際人としての第一歩を踏み出しましょう。

追記：

- 1) VOTAKは、留学生センターの他のプログラム(日本語・日本文化研修コース:日本語力中級から上級の学部レベル短期留学コース)の留学生のチューターグループ「りゅうとも」と共に、「ともだち」という組織を作っています。「ともだち」は、毎週金曜日の5時からミーティングと留学生の勉強の手伝いをしています。(自由参加)
- 2) KISS (Kanazawa University International Students Station) というグループもあります。KISSは、留学生の生活面を様々な面で支えています。留学生センターのもう一つの短期プログラムKUSEP (Kanazawa University Student Exchange Program: 学部レベル短期留学コース、英語を使う)のチューターとしても活躍しています。

大学院予備教育日本語研修集中コース(略して日本語研修コース)
担当：三浦 香苗

日研生が見た日本

2001年度秋学期日本語・日本文化研修コースの調査実習科目でビデオ制作プロジェクトを試みました。この授業は日本語・日本文化研修生（以下、「日研生」と記す）の必修科目であり、彼等を対象にチューター活動を行っている日本人学生のサークル「りゅうとも」のメンバーにも参加してもらいながら、合同調査研究を行う形で実施しています。

今までは研究発表を中心にした授業を行ってきましたが、モチベーションを高めるために、成果がはっきりと形として現れるものと考え、今期はビデオ制作を試みることにしました。プロジェクトの目的は、身近にある日本社会について様々な角度から自らの眼差しで考察する習慣を形成すること、日本人学生との共同作業を通して表面的で終わらない交流を実現すること、異なる文化背景を有する者同士が共同で一つの課題に取り組むことにより、日本社会・文化について多面的な見方を形成することでした。

授業は、日研生・日本人学生が混在する二つのグループに分かれて2本のビデオを制作する形で行われました。テーマ選択に関して、日本の社会問題に関わるものであればよしとし、学生に選択の自由を与えました。彼らを選んだテーマは「フリーター」と「携帯電話」でした。教室での作業として、ディスカッションを重ねながら内容を深める作業、最終的に何を伝えたいかという結論を決める作業、ビデオの構成を決める作業などを行いました。

学期の3分の1が終わった頃から、教室外活動としての取材が始まりました。取材許可が得られない場合もあり、必ずしもスムーズに進んだわけではありません。何より困難だったのは編集作業でした。情報処理センターの協力を得て、ビデオ編集機材を使わせていただきましたが、慣れない機材を使っただけの編集作業に戸惑い、思った以上に時間がかかってしまいました。

面白いことに学生達の出した結論は大人の見方とあまり変わらないものでした。携帯電話を手放せない生活を送っているながらも、その悪影響だけを前面に出す形のビデオが出来上がり、その便利さや若者にとっての魅力が全く映し出されていませんでした。フリーターについても同様で、仕方ない一時的な状態としては認めるとしてもフリーターの存在を肯定的には認めていませんでした。フリーターを増やしている社会背景についてもあまり批判的な面を取り上げていませんでした。主張したいことがないというのは今の若者の現状であれば、残念な気がしてなりません。



ビデオの出来はともかくとして、学生達は熱心にプロジェクトに参加し、その結果ある程度交流も深まったのではないかと思います。工夫を凝らしながら、来年の日研生を対象にプロジェクトを進めていきたいと思っています。

日本語・日本文化研修コース
担当：ルチラ パリハワダナ

総合日本語コース

<平成13年度春学期>

- 登録締め切り後の受講希望を学生への同情から受け入れ、混乱を招いた例があったため、「(正当な理由により) 来日が送れた学生の登録締めきり」を、コース開始後6週間に明確に決めました(総合日本語コースガイドに明記)。それ以後に現れた学生については、一律に断わることにしました。
- 小立野キャンパスに、角間キャンパスに続いて新しいクラスC1を開講しました。これで金沢大学の総合日本語コースは7レベル(A、B、C1、C2、D、E、F)での開講となりました。
(これは、非漢字圏の学生に中上級への進級を容易にするためです。実際小立野にこのレベルを設けた甲斐あって、一度は中級進級を諦めた非漢字圏の学生が非常によい成績で中級に進級しました。)
- 小立野の教室に「配布資料用ドアポケット」を設置しました。欠席学生への宿題などの受け渡しを容易にするためですが、専門のため欠席が多い学生が活用しています。一種の「通信教育」のような感じで利用されています。
- 小立野に(しばらく開講されなかった)Eクラスを開講しました。学習意欲の高かったD修了学生(受講希望人数も多かった)に配慮したわけです。これからも学生のニーズに応え柔軟にコースを運営していきます。

<平成13年度秋学期>

- 出席日数/定期試験の追試許可の条件を明文化し、配布しました。(日本語版の他、英語版、中国語版も配布)
- 残念ながら、諸処の事情で小立野Eクラスを開講しませんでした。なお、来年度も開講の見込みは今のところありません。
- 定期テストでのカンニングが明らかになった場合の処置を明文化しました。実施は次学期から。

<平成14年度春学期>

- 4月12日(金)より平成14年度春学期が始まります。
- 新規受講希望の学生は必ず4月8日(月)午前10時からのプレースメントテストを受けてください。(場所は総合教育棟南棟A3号教室)。なお、プレースメントテストを受けられなかった学生のために、4月26日(金)3限目に追試を行う予定(角間・工学部両キャンパスにて)です。場所については、留学生課または日本語担当教員に尋ねてください。

担当：峯 正志・長野 ゆり

第3期・短期留学生プログラム

短プロ留学生日本武道を教える！

金沢大学短プロ留学生が他大学の留学生に「日本武道の体験」を指導しました。このきっかけとなったのは、7月27日から8月3日まで開催された「JAPAN TENT世界留学生交流・いしかわ2001」でした。昭和63年から始まり、14回目を迎えたJAPAN TENT2001のテーマは「石川で知る日本人の心」でした。金沢大学としてこれに協力しようと考えた私たちは、日本人の心を少しでも知るためには、武道を体験させることが良い手段ではないかと考えました。

そこで、短期留学プログラムの前期(10月)、及び後期(4月)に開講している「武道Ⅰ」と「武道Ⅱ」の授業を選択し、日本古来の武道である「杖道」をほぼ一年間学び、その修得に励んできた第3期生の中から関心を



持ってくれた5人(アメリカ人:一人、フィンランド人:二人、ドイツ人:二人)を募り、8月1日に金沢大学体育館において「日本武道の体験」を指導しました。

杖道というのは今から約400年前に創始された古い武道の一つです。長さ四尺二寸一分(約128cm)、直径八分(約2.4cm)の檜の丸木を使い、槍、薙刀、太刀の三つの技法を取り入れた総合された武道ということができます。

JAPAN TENTの参加者22人は、初めての道衣と袴にとまどい、特に袴のひもの結び方が難しかったようです。しかし短プロ生の着付けの手ほどきと、留学生課スタッフの素早い応援で、10分ぐらいで着けることができました。



次は、恵土孝吉教授(教育学部)と剣道部員に協力をいただき、短プロ生と一緒に剣道、居合道、杖道の演武を行ないました。その後、「武道」の精神についての講義のなかで、礼や黙想の意味などを説明し、杖道の

実践的練習に入りました。礼の時にはただ単に儀式として頭をさげるのではなく、身を守りつつ、しかも指導をしてくださる先生への感謝と敬意、そして先生の方は道を学ぶ者に対して最善を尽くす意思を表現するものであるという説明と、短プロ生たちのみごとな



モデルに受講者たちは驚いていたようです。

実践練習は、初心者にはけっして簡単ではない「本手打」、「逆手打」、「返し突」の基本や「着杖」という型を指導しました。短プロ生はその際もわかりやすい見本や丁寧な教え方に一生懸命な姿を見せてくれました。暑い体育館の中でJAPAN TENTの受講生は真剣に取り組み、「日本武道の体験」が終わったあとも学生たちの交流が続いていました。それもこうした身をもっておこなう文化体験のよい点かと思えます。

5人の短プロ生は、その後9月に帰国してからも杖道を続け、ときには指導に当たっているということです。それを聞くと本当にうれしいと思えます。

担当：ビットマン ハイコ



第2期・日韓共同理工系学部留学生コース

(通称：日韓プログラム)



富山空港到着（中央左が徐君、右が金君、右から2番目は1期生の李丞才君）

応援してくれました。特に来日前から電子メールで金沢大学での生活についての情報を流してくれたため、2期生は比較的早く生活に慣れることができましたようです。

第2期は、韓国での予備教育で日本語学習の時間が減ったことに対応して日本語の授業時間を2コマ増やしました。1コマはコンピュータの時間に、もう1コマは読解の増強に充てました。

また第1期と同様に日本事情体験学習として、「金箔工芸体験」や「コンピュータ・ディスプレイ会社見学」、「酒造会社見学」を行いました。

この4月に2期生は工学部へと進学します。同時に韓国では3月から第3期生の予備教育が始まりました。金沢大学では第3期に向けて、理工学部の日韓プログラム参加が決まりました。これで工学部と併せて11名の受け

金沢大学では第1期に引き続いて今年度、第2期生2名を受け入れました。金燮(キム・ソップ)君〔工学部・情報システム工学科進学〕と徐敬昊(ソ・ギョンホ)君〔工学部・電気電子システム工学科進学〕です。

たった2人だけでこぢんまりとしすぎて、時には寂しすぎると感じることもありましたが、少人数だからこそ結束の強い第2期でした。

また、2期生には1期生という心強い先輩がいろいろな面で



金箔工芸体験（市内の「さくだ」にて）



酒造会社見学（市内の「福光屋」にて）

入れ枠になります。
こちんまりとして
いた1期・2期に
比べて、大所帯でに
ぎやかな第3期と
なるのでしょうか？
この10月が今
から楽しみです。

担当：太田 亨



修了式（2002年3月14日）

相談室からのお知らせ

最近の相談より、留学生の皆さんに気を付けて頂きたい事があります。

<その1> 貴重品はしっかりと管理しましょう

留学生にとって、パスポートやお金はとても大切なものです。研究室やアパートを空けるときには、部屋をロックするなどして、貴重品をしっかりと管理しましょう。

大学のキャンパスには、たくさんの人々が入り出りをしています。大切なものを置き忘れたり、取られたりすることの無いように、普段からの自己管理をしっかりとしておきましょう。

<その2> 車を運転する人は必ず、保険に入りましょう

とても残念な事ですが、自動車事故のニュースを多く聞くようになりました。冬の雪道での事故をはじめ、留学生が加害者になったり、被害者になったりしています。

とりわけ、交通事故の加害者のケースでは、多額の弁償金の支払いを求められます。日本で車を運転する場合には、「任意保険」には是非加入してください。

また、友達のを運転する時も、その車が任意保険に入っているかどうかを確かめてください。

保険に加入していない車を運転することは危険です!!!

<その3> 留学生センター以外の相談担当者

センター以外にも学内では相談やアドバイスをを行っています。困った時には連絡してください。秘密厳守は言うまでもありません。

角間キャンパス

経済学部 宮崎悦子先生 076-264-5442

小立野キャンパス

工学部 岸田由美先生 076-234-4936

中崎崇志先生 076-234-4567

(月曜 13:00~15:00のみ)

八重澤 美知子 Michiko Yaezawa

(松下)

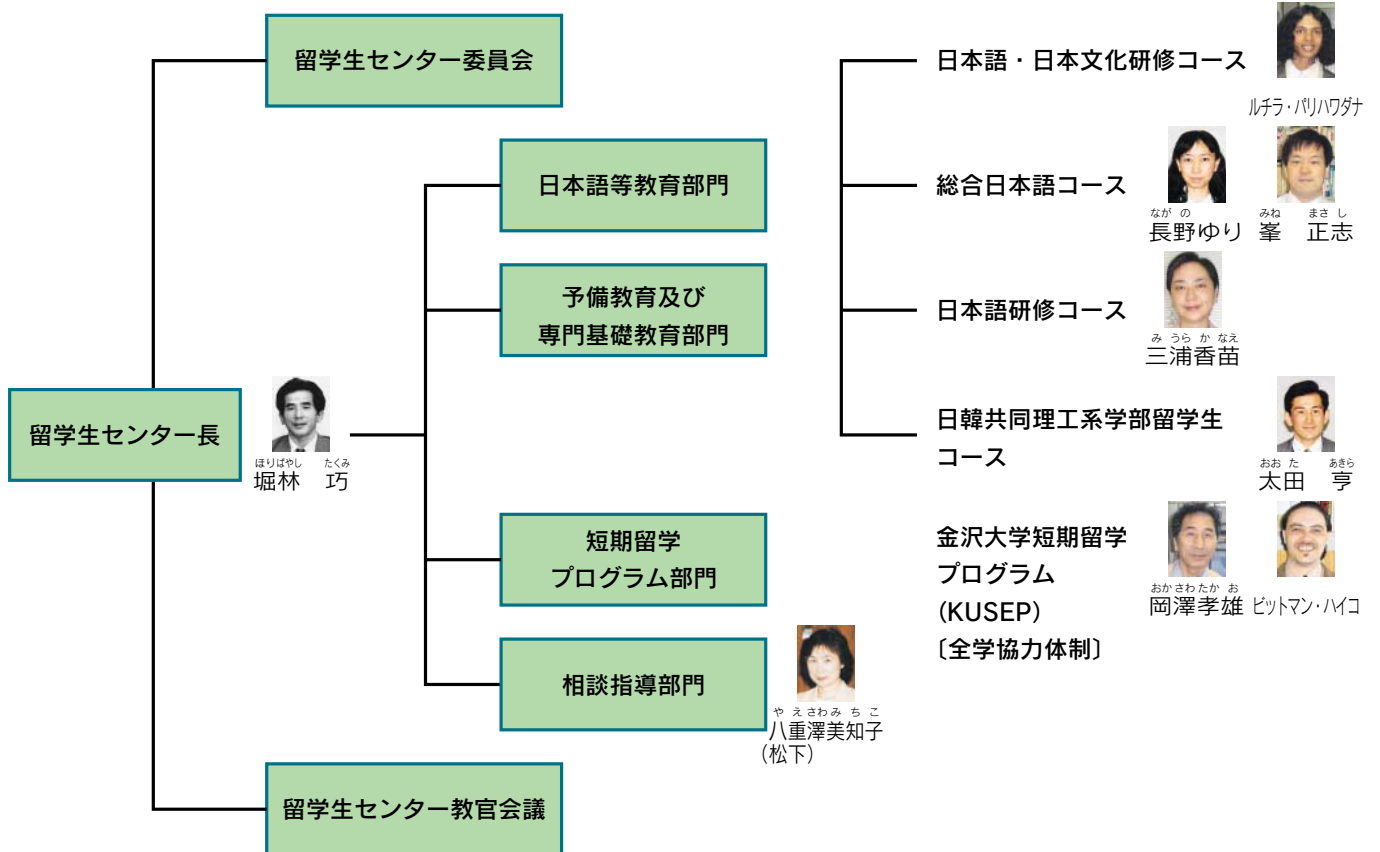
金沢大学留学生センター

Kanazawa University Tel : 076-264-5770 Fax : 076-234-4058

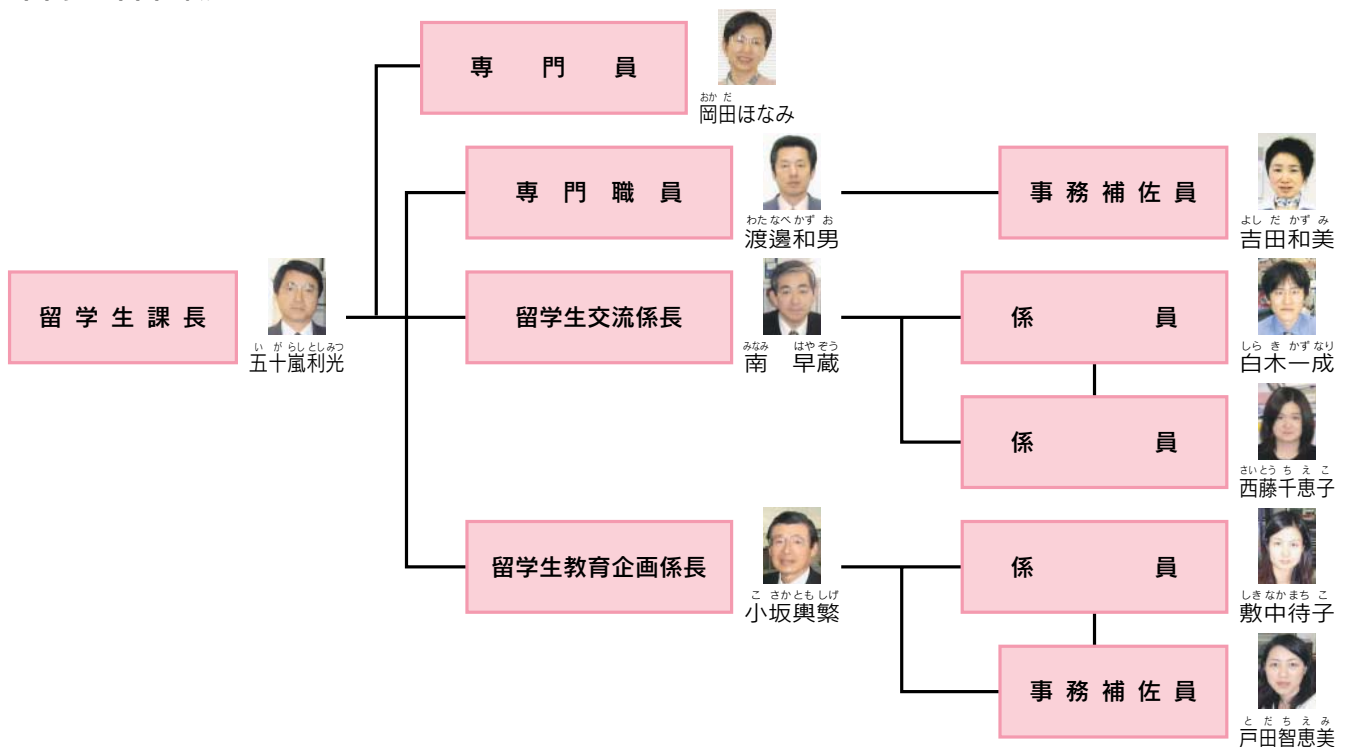




留学生センター組織



留学生課組織



金沢大学留学生センターニュース 第5号

2002年3月30日発行

発行 金沢大学留学生センター

〒920-1192 金沢市角間町

TEL (076) 264-5188

FAX (076) 234-4043